社會經濟體系

豫約募集

漲る各方面の要求は此體系を作り上げた。此は單なる部分でなく綜合である。社會科學の一切を網羅せる本體系の如き他に類例ありや。學徒と實際家と席を共にして社會を語る偉容を見よ。眞理の前に轡を並ぶる左右兩翼の壯觀を見よ。類似の企を膝下に踏まへて今や本體系は巨人の如くに姿を現した。智識を求むる者よ成長に憧るゝ者よ我が體系に來らずや

◇經濟學◇
◇社會經濟學……高田保馬
◇經濟學……九大教授 文學經濟博士 高田保馬
◇經濟哲學……帝大教授 經濟學博士 土方成美
◇經濟政策原理……早大教授 二木保定
◇經濟學前史……專大教授 高橋誠一郎
◇正統派經濟學……專修大學教授 ◇歷史派經濟學……九大教授 田邊忠男
◇マルクス派經濟學……同 河合榮治郎
◇國家社會主義派經濟學……帝大教授 蠟山政道
◇英國經濟學……帝大教授 土方成美
◇獨逸經濟學……帝大教授 小林良正
◇歐州資本主義發達史……專修大學教授 田邊忠男
◇日本經濟史……帝大教授 本位田祥男
◇維新時代經濟史……京大教授 本庄榮治郎
◇日本資本主義發達史……帝大教授 谷口吉彥
◇支那經濟史……慶大教授 高橋龜吉
◇商業……文學博士 加藤繁
◇財政學……慶大教授 村瀨直壽太郎
◇財政學……帝大教授 土方成美
◇財政學史……法學博士 三毛廣之助
◇地方財政……法政大學教授 三毛廣之助
◇稅制問題……內務省書記官 田中廣太郎
◇公債問題……大藏省書記官 小川鄉太郎
◇豫算論……帝大教授 西野元
◇官業論……東京帝大教授 田中穰
◇財政統計……京大教授 汐見三郎
◇歷史哲學……帝大教授 戶田正雄
◇經濟史總論……帝大教授 土方成美
◇經濟學博士 河津暹
◇獨逸經濟史……帝大教授 小林良正
◇歐州資本主義發達史……專修大學教授 田邊忠男
◇日本經濟史……帝大教授 本位田祥男
◇維新時代經濟史……京大教授 本庄榮治郎
◇日本資本主義發達史……帝大教授 谷口吉彥
◇支那經濟史……慶大教授 高橋龜吉
◇商業……文學博士 加藤繁
◇財政學……慶大教授 村瀨直壽太郎
◇日本經濟學史……荒木光太郎
◇支那經濟學史……慶大教授 滿本誠一
◇資本主義社會の解剖◇
◇資本主義の概念……今井伍介
◇資本主義の基調……帝大教授 本位田祥男
◇資本主義の長所及形成……東京帝大教授 土方成美
◇資本主義の本質及形成……早大教授 田邊忠男
◇資本主義の社會解剖……慶大教授 土方成美
◇資本主義の社會學的考察……九大教授 矢野仁
◇資本主義批評……高島素之
◇末期の資本主義……山川均
◇社會思想◇
◇國家主義……田中香
◇哲學……村上亨
◇ロマンチシズム……岸本誠二郎
◇自由主義……今井嘉一郎
◇政策……永井亨
◇ユートピア社會主義……土田杏村
◇リカルド派社會主義……堀大
◇マルクス派社會主義……山田盛太郎
◇唯物史觀……波多野鼎
◇新カント派社會主義……河合榮治郎
◇英國派社會主義……河合榮治郎
◇サンディカリズム……北澤新次郎
◇ギルド社會主義……河田嗣郎
◇無政府主義……藤本和夫
◇レーニズム……井悅
◇ファシズム……
◇社會問題總論◇
◇社會主義運動史……石川三四郎
◇インターナショナル……山川均
◇各國勞働黨……藤井悅
◇無產政黨……麻生久
◇勞働組合……田邊忠男
◇勞働法概論……末弘嚴太郎
◇勞働保險……本位田祥男
◇消費組合……今井嘉一郎
◇貧困……東京帝大教授 田邊忠男
◇社會問題……東京帝大教授 石川三四郎
◇人口問題……帝大教授 矢內原忠雄
◇農村問題總論◇
◇日本の農業……農學博士 那須皓
◇農業政策……農學博士 河田嗣郎
◇農村問題……帝大教授 矢作榮藏
◇農業政策……法學博士 石賀信夫
◇產業◇
◇日本の產業……東京帝大教授 武藤山治
◇紡績……鐘紡社長 武藤山治
◇產業……專大教授 牧野輝智
◇產業組合……專大教授 佐藤寬次
◇產業經營……帝大教授 馬場敬治
◇商工業……法學博士 渡邊鐵藏
◇商業政策……法學博士 河津暹
◇工場管理……大藏省技師 神田孝一
◇貨借對照表論……法學博士 增地庸治郎
◇株式會社……專大教授 小島精一
◇カルテル・トラスト……專大教授 佐藤寬次
◇企業……法學博士 上田貞次郎
◇企業論……帝大助教授 中西寅雄
◇取引所論……東京理事 長濱欽司
◇保險論……法學博士 堀江歸一
◇貿易問題……法學博士 末弘嚴太郎
◇恐慌論……法學博士 勝田貞二
◇景氣循環論……大阪府立商業學校 末定廣
◇物價問題……法學博士 河津暹
◇信託……法學博士 三潴信三
◇外國爲替……慶大教授 森廣藏
◇庶民金融……專銀頭取 小林丑三郎
◇我國の金融……東京帝大教授 野崎辰雄
◇金融問題……帝大教授 井上準之助
◇財政……帝大教授 山室宗文
◇財政學……帝大教授 井上清
◇稅問題……神戶高等商業學校 神戶正雄
◇財政統計……京大教授 汐見三郎
◇法律……帝大教授 高柳賢三
◇法律學……帝大教授 田中耕太郎
◇憲法……帝大教授 小野清一郎
◇法學……帝大教授 野村淳治
◇民法……帝大教授 穗積重遠
◇刑法……帝大教授 牧野英一
◇宗教と法律……帝大教授 三谷隆正
◇政治……帝大教授 河村又介
◇政治學……帝大教授 高田保馬
◇政黨……帝大教授 中村孝次
◇政治思想……帝大教授 高橋清吾
◇政治史……帝大教授 今井登志喜
◇國家……帝大教授 長谷川如是閑
◇國際政治……帝大教授 吉野作造
◇外交……帝大教授 信夫淳平
◇國際政治……法學博士 尾崎行雄
◇明治政治史……法學博士 吉野作造
◇憲政史……法學博士 鶴見祐輔
◇行政學……帝大助教授 今井時郎
◇政治批判……帝大助教授 戶田貞三
◇社會學……九大教授 文學博士 高田保馬
◇社會學……慶大教授 加田哲二
◇社會學發達史……東北大學教授 河村又介
◇現象派社會學……東京高師教授 綿引朝二
◇社會心理……東京帝大教授 新明正道
◇社會意識……長谷川如是閑
◇日本社會史……東大教授 高橋貞吾
◇ロシア社會誌……帝大助教授 今井登志喜
◇家族制度……帝大助教授 戶田貞三郎
◇親族制度と相續問題……法學博士 穗積重遠
◇婦人問題……慶應學博士 永井亨
◇婦人問題……慶應學博士 山川菊榮
◇婦人論……慶大教授 櫻井繁
◇婦人勞働問題……慶大教授 櫻井繁
◇婦人運動史……日本婦人參政權獲得期成同盟 市川房枝
◇婦人職業問題……慶大教授 櫻井繁
◇婦人問題……慶大教授 櫻井繁
◇家庭と婦人……河崎なつ
◇婦人と文藝……奧むめお
◇農村經濟……農學博士 小平權一
◇農業金融……農學博士 小野武夫
◇小作問題……日本農民組合 杉山元治郎
◇近世農村疲弊の變遷……農學博士 須永皓
◇農民組合……帝大教授 河合榮治郎
◇農業と社會主義……
◇土地國有論……

全十八卷 一ケ年半完了

▼本體系の誇▲

本體系は學界の權威五名が各自の決議して共同に從つて最も適當と信ずる人選を以て計劃し項目を選び一見して相當の會員を選び決定したる後に發表するものである。

內容見本 申込次第進呈

▼立大關廣告による旨附記ありたし

◇毎月一回◇全十八冊完了◇菊大判紙裝三百八十頁以上◇一ケ月貳圓、六ケ月拾壹圓五拾錢、一時拂參拾參圓

十一月三日締切

日本評論社

東京本郷弓町一ノ二五
振替東京九六七八
電話小石川一九七一・二九三三

世界哲學大系

綜合大學講座

第二回會員募集

締切前にても申込次第配本
毎月二回發行・一ケ年完了
◇四六版紙裝函入各冊平均二百四十頁◇
全二十四卷・總計六千頁

——講座內容——

哲學概論……大東文化學院教授 北吟吉
日本思想史……文學博士 永井茂助
東洋哲學史……文學博士 宇野哲人
西洋哲學史……日本大學教授 松原寬
宗教概論……日本大學講師 江部鴨村
佛教概說……文學博士 忽滑谷快天
基督教概說……文學博士 元田作之進
倫理學……哲學博士 神戶大學教授 松永材
早稻田大學教授 文學博士 櫛崎淺太郎
教育學……東京高師教授 文學博士 小林脩平
高等師範助教授 河合讓
心理學……マスター・オヴ・アーツ 石丸梧平
性教育……市川源三・中桐確太郎
文藝……日本大學講師 石丸梧平
日本文學研究……圖書院大學教授 折口信夫
西洋文學研究……大每學藝部長 小山內薰
演劇……慶應大學教授 川路柳虹
吾國の政治……慶大教授 法學博士 占部百太郎
諸問題……中央大學教授 川原次吉郎
經濟學……法政大學教授 高木友三郎
財政學……早大教授 宇都宮鼎
社會政策……慶大教授 宮卯之助
社會問題……早大教授 大山郁夫
自然科學……理學博士 石原純
人生……帝大教授 理學博士 永井潤

會費
一ケ月金二圓四十錢　三ケ月金五圓七十錢
六ケ月金十一圓　一ケ年金額金二十一圓
◎外に送料一ケ月十二錢宛を要す。

內容見本 無代進呈

◇今すぐハガキで申込あれ◇

本日締切

發行所
東京芝區白金三光町
聖山閣
振替東京四二五四〇番
電話高輪七〇五八番

全二十四卷・一ケ年完了
◇四六版總布製・各冊平均二百五十頁◇
總計六千五百頁　毎月二冊配本正確

編輯顧問
文學博士　井上哲次郎先生
文學博士　宇野哲人先生

哲學概論……日本講師 岩崎務
ブラトンの哲學……日本講師 衞藤幹太郎
アリストテレスの哲學……文學士 仲小路彰
デカルトの哲學……文學士 高橋清吾
ビノザの哲學……文學士 高井登志喜
ライプニツの哲學……文學士 高山峻
カント哲學……文學士 佐藤賢
ヘーゲル哲學……文學士 見尾勝馬
ベルグソンの哲學……立教教授 三枝博音
ハウエルの哲學……日大教授 山口察常
ユームの哲學……文學士 高橋良雄
ルツの哲學……早大教授 松岡亀次郎
ルツの哲學……早大教授 松永材
ルツの哲學……齋藤賦
ルツの哲學……東京高等教授 山口察常
ルツの哲學……立教教授 小島茂雄
ルツの哲學……立教教授 三枝博音
ルツの哲學……文學士 高橋良雄
ルツの哲學……文學士 高橋良雄
ルツの哲學……文學士 高橋良雄

學生生活の一考察

教授　竹村豐太郎

閥閥は一の財産であり、今日の資本主義の社會では一の私有財産である。故に今日ともすれば私有財産が不公平且不正に分配される如く、閥閥が不公平且不正に分配されるかも知れない。又不正な分配によつて獲得された私有財産が掠奪物であるやうに、不正な分配によつて享樂されてる閥閥も赤掠奪物である。私有財産制度を公益のために共有財産管理の精神を以て支持し得るとすれば、この精神に反する私有財産使用が文明に對する背反であるやうに、そのやうな閥閥使用者は人類幸福の敵である。

この論の證明となるものに學生なる一の社會地位がある。大部分の今日の學生は閥閥の產物である閥閥は其本質上資本家の專有である。然し學生は如何なる種類の資本家團よりも純粹な有閥階級的結晶體である。

生産の後に消費があると云ふのは事實ではない。究極のはじめにおいて神が天地を創つたのである人は力を案つて然る後に之を驅使する。故に赤ん坊の、子供の、病人の、而して學生の有閥階級の存在が許されるのである。

一般にかゝる有閥階級は其生存を各個人毎に所屬してゐる共產體即ち家の經濟生活における餘剩價値の大小に綿んで始めて、偶然と云ふこと以外に何等合理的理由なくそれ〴〵の家に生れて來て多くの中流上流家庭の子女は貧民の子女として生れたならば扶育の不行屆の爲に恐らく生存が不可能であつたらうと思はるやうな劣弱な體驅を以て生れながら、健康に成人する。

然しとに角、赤ん坊の、子供の病人の有閥階級的には目立たないそれは一通りは貧富と通じて存在するからである。之に反して學生の組織する有閥階級は甚だ社會階級的である。私はこゝには殊に高等教育をうけつゝある學生を云つて居つたのである。

偉大なる資本主義者編纂先生は學問は金持の道樂であると云つた然り今日學問修業には私有財産と深い關係がある。今日青年が高等教育を受けることは本人の希望、能力より、一層彼が偶然生れて來た家の私有財産に關係がある。ある家がその子女に高等教育を授けてると云ふことはその家が教育に熱心であると云ふこと以上に其家の富んで居ると云ふことを表はして居るのである。

プロレタリヤの子女は十三歳にして既に無閥階級である。彼等と共に小學校を卒業した級友の二割だけが何かの種類の上の學校へ行く。後者はそれ程秀才であると云ふのではない。その家がそれほど富んで居ると云ふのである。

全數の二割の中に算へられる程の幸運者の中の更に幸運な何分の一かが高等教育を受けるべく進んで行く。少數の貧窮生と苦學生を除いて、大學は私有財産制教團である。學生は閥閥を食べて生きてゐる。

私有財産としての閥閥が學生を學生たらしめて居る幸運を私は彼の爲に有りがたく思ふ。彼がもし勉學が共有の閥閥によつて行はれ能力だけの競爭で選ばれるならば勉學を許されないかも知らない位の純材でありながら、私有である爲に現にそれが出來ると氣がついたなら、惠まれた過分の幸運を思ふて襟を正すべきである。そして更にもし自分に過分な幸運をより多く資格を持つた他の人に讓渡するだけの機會と勇氣とがないならば、それを享受しつゞけて行く自由を束縛することは私には出來ない。多分、如何なる純材と雖もまづはじめに教育を受けて行くならばそれ相當の利益は收穫出來るからである。

然し、私有閥閥の故に學生としてあり得るものは彼等の既知の及び未知の多くの彼と同時代の小學校優等卒業のプロレタリヤの子女で、今日或は機械工となり小作人となり馬方となり、タイピストとなり女店員となり妾となつてるものが自分に對して投げてゐるであらうところの鋭い眼光を良心を以て感じなければならない。

貴族だけを知つて饑餓を知らない有產階級が貴族を知らないで饑餓だけを知つてる無產階級の警告によつてめざめるのは歷史上習慣のやうに見へる。けれどそれは決して幸福な習慣ではないのだ。小學校を出た時の八割の、更に其數を增して來てるほつの同年輩の無閥階級がこの社會的寫實濃厚な今日如何なる思を以て大學生を考へてるかを想像して見るがよい。更に、費間激しい勞働によつて生活を支へながら夜學に行つてわずかに習學識を滿足させなければならない秀才の家の二階を借りてる大學生が講義と閥閥に飽きて學樂を意つてることが如何なる感想を毎日其秀才に與へつゝあるかを想像して見るがよい。

中世紀の下民ならば屈從と同情があつたやうな場合、今日のプロレタリヤには階級的反感と冷笑とが生れがちなのである。

學業の爲の閥閥が如何なる價を以て購はれるべきかを知りたい人は、午後九時から九時半頃、神田の學寮街から其近くの者閥閥のある家に行つて見るがよい。夜學生が自己の勞働によつて購つた、尊い然も其の品質の頗る劣等なる閥閥によつて貪るが如き學修をおへて、直に死の如き眠りと明日の勞働とに壓迫を生じながら街路の空氣を震はして潮のやうに流れて行く。

貴族、選民特權階級、これらの文字は今日新らしい思想を追ふものにはゝやらない。しかも學生はまさにこれらである。時には過分なる閥閥が私有財産制の保護の下に不當な程に與へられて居る、況んや公益の爲めの共有財産視の名目の下にかく女配され享受されるならば人類幸福の敵であるとさへ云はれるであらう

資本主義の種蒔の下に、將來は學士になり、高等官になり、重役になり、著作家になれる美しき期待まで添えて、現閥度の寵兒の如く閥閥を貪れる學生階級に對して全無閥階級の青年子女が鋭き注目をはじめつゝある時相を察知したいのである。希くばその注目をして喜ばしき期待にまで生長せしめよ（十五、九、二一）

◇……◇ブックレビュー◇……◇

大野信三君譯 カツセル經濟原論

教授　田邊忠男

大低の人は著書と云へば必ず譯書より大なる學問的價値を持つと考へる。著書が普遍妥當性を有する獨創的見解に充ちて居る場合には、私と雖も異論を唱へない。併し我國の經濟書の多くのものゝやうに、著と云ふのは譯程正確でない、且つ精密でない歐米の學說の紹介であり著者の意見と云ふのは、幾つかの他人の說の云はゞ糊付に使用して居る接續詞的な句に過ぎないならば、歐米名著の忠實なる譯の方が何れだけ已をも、學界をも稗益するか解らない。實際名譯と云ふものは、生涯平可の著書よりは遙に大なる努力と良心を必要とするものである。此意味に於て大野君のカツセル經濟原論の譯に對して禮讚の辭を呈し度い。

原著者は瑞典ストックホルム大學の教授であつて、學界に於ては既に餘程以前から認められて居たが、一般的な評判を得たのは、此原論の發行後並に國際聯盟の專門經濟委員として、貨幣政策に就て報告書を出した時の八割の、更に其數を增して來てるほつの同年輩の通貨收縮の俗說に反對した後である。

此原論の體系を一言にして盡せば『經濟理論は價格理論である』と主張するものである。此點に於て稍もすれば『貨幣的なる假面を剝ぎ』と主張するものの、大なる立場統經濟學派との間に、大なる立場の差があり、寧ろリイフマン氏と同意見である。併し後者が墺太利學派の限界効用說の上に築き上げて居るのに反し、カツセル氏は英國正統經濟學派の說を補正し發展した英國正統經濟學派の間に、大なる立場の差があり、寧ろリイフマン氏と同意見である。併し後者が墺太利學派の限界効用說の上に築き上げて居るのに反し、カツセル氏は英國正統經濟學派の說を補正し發展せしめて居る。價格理論其者に就てもリイフマンは主觀說であり、カツセルは客觀說である。

私の方法論はカツセルとは異つて、カツセルは統一せる且つ十分に根據付られた方法論を說いては居ない）今此點を詳細に說明する譯には行かぬが、私のカツセルの原論を、推賞する理由は此原論が前述の如き立場よりする所の、英國正統經濟學派の諸學說の論論破でもあり、同時に其取る可きものについての長ふ點である。更も角、原著が苟も經濟學に志す以上必讀す可きものたるは疑が無い。

大野君の譯文は忠實であり、精確であると云ふ限りでは、先づ申分はあるまい。平明を期すると云ふ方面からは、望蜀の感が幾分はある。併し之は殆んど至難事を責めることになるであらう。病軀を押して學界のために此大業を完成せられたことに對しては、學界の一隅を汚す者として感謝の念に充ちも、此篤學の士が目下逆境に沈論して其志を得る能はざることに思ひ至れば、胸迫るを覺える。併し人生は長い。私は學界のため、又一人生涯のため君が驥足を延ばす日があることを確信して居る。

部長問題から 雜誌部にごたく

部會を開き先づ一段落

殘された癌は豫算？

先學期末大正十六年度學友會總會の結果として新聞學會は雜誌部の一部として認められゝに至り、雜誌部内には『塔』及立教タイムス並に新聞學會の三團體を含む事となり

此の事

豫算分配に對する編輯容易にはかどらず、殊に其の部員に補ふ新なる策動の行はれた節もあり國部内の三團體は共に獨立した。

部内の

を動機に候補中の雜誌部長は宇佐の解釋の相異であるとの釋明ありて終結を告げ

をなしたるものにて雜誌部長は

殘された癌は豫算？

ひの上にて編輯本教授を部長として推薦する事に決定し、同席上部名を『新聞雜誌部』と變更する決議を以て將に國部長武藤教授、新聞學會長編輯本教授並に久保田教授の推薦を部長として

部長

の雜誌部長の推薦の急務たるの論出で三團體の間に種々と賣買の交換あり、前

社會科學研究に學徒を誘導せんと

學界權威者の發企に 新團體が生れる

京大を中心とする社會科學研究團體の連絡は極度に緊密になつて來たのに際し此の度上田貞次郎、小泉信三、末弘嚴太郎、高田保馬、櫻井儀一郎、永井亨、土方成美、吉野信次、蠟山政道、田邊貞吉、蠟山芳郎の九氏は去る六月以來しば〳〵會合して

「經濟」政治、法律は勿論哲學、宗教、倫理等の精神文化に關する學問を結びつけて、それに社會學、社會主義、社會政策の各方面から社會科學を總合的に研究する團體の組織を計畫して居たが

先月二十八日夜學士會館の幾度目かの會合の後いよ〳〵社會科學團體を作る事に決定した。此の事は一方に於て學生中にはよき指導を得ない爲めに

往々研究の範圍を越える傾向もあり此等學生を進むべき道に導まし め一方に勞働運動の指導原理の研究を行ふ爲めで、他社會科學の研究に對して歪曲その他の誤解ある場合はこの團體を中心として研究の自由の爲めに戰ふ事を申し合せたと傳へられて居る。

力作を 大に歡迎する。今度の特別寄稿家は宮原民平、辻潤一、須井一、石川剛その他數氏である」と謳られた。尚發企人の某氏は「大分遲れて申し譯がないが今度はいよ〳〵發行されることになつた。現在立教大學の文化運動に對する活躍が頗る顯々たること

流産の噂もあつた 文藝雜誌『鐘』

月遲れの誕生をする 創刊は來る二十五日？

喧嘩以來校友の一部有志間に於て協議中であつた本學文科を背景とする純文藝雜誌『鐘』の發行の件はその後具體化して編々の確定を見本年五月一日

創刊の運びになつたことは當時本紙に於て報道した所であるが、その後如何なる關か今以て決定の發行に至らず、或る者の如き立ち消えになつたのではないかとさへ云つてゐる樣な噂であ

る一日その後の事情を尋ねようと同人の一人なる井藤太郎氏を訪へば「色々の事情から發行が延びに延びとなつて了つたが、今度はいよいよ十月二十五日に發行することになつた。今の所田中玉堂氏の原稿が來てないが五日には來ることになつてゐる。それで九日には印刷する筈である。創刊號は主に特別寄稿家の原稿を載せるが第二號よりは一般有志學生の

とは遺憾な事で「鐘」は此意味に於て二三の校友の間から、奮然發起せられたのであるが、今後學生が大に援助を與へられ、或は同人に參加することを希望する次第です」と語つた。事實この二十五日から編が現れるものとすれば、今後の立教の文化運動は期して待つものがあらう。

富田教授 新任す

今夏以來千葉縣竹岡不動院に病氣療養中だつた高垣教授は今學期に入つてもその容體捗々しからず、別項記載の如く目下逗子に轉地し根本的恢復を行ることゝなつたためその補充として、文學士富田彬氏が新任された。同氏は東大出の新進にして、英文學專攻の由である。目下の所經濟科商學科各一年及び豫科商科一年の英語學を受け持たれてゐる

本學哲學會 例會開かる 一日午後

立教哲學會十月例會は一日午後三時、十二番教室に開催。演者は辻教授「ホフマンの音樂觀」に就て」。藤井章教授、右演題は教授の研究に關する學問の領域に關する哲學、倫理學、宗教學、藤田王堂教授以下會員哲學科學生等之に出席。引きつづき教授に入り七時半解散、當日左記事項決議報告

（セミナー）大槻勉教授『カントの第一批判』は今月十五日以後

豫科本科を含む全文學部唯一の機關たる塔は其赤跡の表れのあまりに遲々たるを疑ぜられてゐる向あるとしても、去る六月八日の文學部大會に於て決定した

方針の もとに奮々と進みつゝある事は一部のものに認められてゐる。先に催しとして佐々木茂索氏の文藝講座を聞いた事は既に報じた通りであるが今回高垣教授辭任の爲め教授久保田正次氏を新に顧問とし內容の充實に

小山內氏を聘し 文藝講座を 秋の計畫として

▽……『塔』同人主催

め一新面を開かんとしてゐる折柄第二回目の催として十月八日（金）九日（土）午後一時より雜誌部塔主催にて小山內薰氏を聘し「演劇に於ける俳優價値と舞臺術價値」の演題のもとに文藝講座を開く事になつてゐるが、小山內氏の

豐富な る講演は主催者側は勿論多數文藝愛好者の期待となつてゐる。聽講券は塔舍十七號を買つてもらつて之に代へ場所は未定なるも多分校友會館ならんと

多年間盡力の功を多として

三教授と會計顧問 名譽評議員に推さる

太刀川久保田、淺越、根岸の三教授及び會計顧問杉野氏は、明治の背景地の學園を若しく巢立つて前三氏は新進教授として教壇に立ち杉野氏は職員として學院に奉職されてから今年で實に三十年の長日月を閲してゐるのであるが今回輝かしき榮譽に肖者を滲ぐ熱心さである。功成り名遂げた今日では久保田氏は部長として令名嘖々たるものあり、杉野氏は會計顧問なる名譽職にありて共に本學發展の一員として盡力されて來たのであるが、今回その多年の功勞を表する意味に於て前記二氏と淺越、根岸の二教授の四氏は滿日の當日開催の幹部會に依つて新たに名譽評議員として推薦されることゝなつた。今後益々本學の中堅として盡力せられる筈である

教を破つて巢立つ 學府の鳥

早くも就職の噂

二學期に入つた！來春學府を巢立つ人達の間には早くも卒業後の話が、噂に上りつゝある折柄之等の人達が殺到に久保田（金）教授の許へ呼ばれて居る。言ふ迄もなく年卒業生の爲め就職の事について非常なる力を盡して下さる久保田教授であるから本年もその事を今から心配して居て下さるのである。來春太學を出て社會へ職を求む

冬は冬しかちは

本大學……

溫情の主を尋ねて 機關部訪問の記

秋は落葉の數を增して行く。近頃滅切り寒せた日射しに冬近しーを思はせる。

そろ〳〵教室に催へ付けたラヂエタの効用を感じ出す日が多くなるだらう。

『さあ、師走の時が來るぞ』つてそして『學生さん達、師走の吐息でしつかり勉强して下さい』つてラヂエタが云ふ日が……。

さても、我々は、これより、このラヂエターの恩惠を蒙るのである。

◇……◇

それで一日、記者は機關室を訪れた。

全面混凝土で固められた地下室むーつと、先づ暑さが迫つて來るこれだ、冬日、全校の保溫を調整する」が忍ばれる。

記者は先づ機關部の主矢作さんに遇つた。

「滅切り寒くなりまして」

「そうですね」矢作さんはそう答へながら、「これからだ……と云ふ合圖を眉間から放射した。それから暫間は矢繼早に飛んで行つた矢作さんは、無持よく流して行つてくれる。彼は流石本大學總繼以來の機關部の主である。

上下、矢作さんの話を滿載しよう。

◇……◇

此の汽罐は米人ウイリアム、ブラウンと云ふ米人の設計になるものである。觀は餘り類の無いものである。觀多になると北の汽罐からは約十倍度位の壓力のドラフトステイムが作られて部屋を六十度位に溫めるそうだ。

それで一日の石炭の消費量は三噸位で一冬に費す量を考へてみると約二〇〇噸近くは必要だろう。

『神々、三噸を一日にくべるのですから「賜手二人がつき切りでね」とは矢作さんの述懷である。

『その代り、此所にゐると冬知らずですよ。昔な夏シャツでやるんですからね』と、肩を搖すぶつた矢作さんは、此の所稍得意の態であつた。

汽罐の近くでは九十度に近い熱が放射されると云ふから無理はない

◇……◇

やがて矢作さんの案內で機關室を一巡した。

黑く塗かれた汽罐の面、それは三つも並んでゐた

その汽罐の背にはパイプが鐵筒地圖の樣に走つてゐる。

一巡を終ると、記者は矢作さんに厚く禮を述べて、無表情なる本大學の黑服者に別れを告げた。

右は矢作技師と左は助手である

研究旅行から 史學會員歸る

＝お土產論文の作製中 だと快い旅路を語る＝

益々盛大となりたる本學史學會は去る九月二十二日夜十時半頃宵森一郎にかけての研究旅行を決行した

マ教授 去る一日歸學 郷里アメリカに在つた同君の御

夜　一幕　渡掛氏
大往生　二幕　伊藤氏
日夜　一幕　岡田氏
『心理の街』研究　田中氏

新裝を整へ 『塔』發行 本月六日に

本學雜誌部發行にかゝる『塔』第十七號は來る六日頃發行の豫定であると聞へられたが、本號は戲曲號と銘して內容は大體次の通りである

夜　一幕
大往生　二幕
日夜　一幕
『心理の街』研究

規則改正 委員の觀る學友會の現狀（四）

學生教授間の輿論の融合が必要

英語部長　根岸教授

學友會規則の改正の聲を聞くや久し實行困難の規則は寧ろ無きにしかず、規則ありても之を實行するために口角泡を飛ばし時としては鐵拳を以て人に接すと云ふが如きは餘り面白き現象にあらず若し規則を改正して此の弊害を矯め得べくんば規則を改正するに若かず、其處で規則改正委員の任命が出來たのである故に規則が改正せらるる

去によりその草案のため御家族御同伴六月中旬に歸國の途に立たせられたマックニー教授は滯米僅二ヶ月の後本月一日元氣な顏を以て學府に歸られた

同行者は史學科二年大澤、岡田、小野、胡桃澤の四氏にして壯行餞

探査し それより多賀城を見て鹽釜に至つた。同所に於ては既く知れて居る鹽釜神社をしたしく見て、松島に至り、瑞巖寺、五大堂を回り其れより平泉の毛

愉快な 旅行を終しました、あちらでは一同の目的が史跡探査にありますので共に其の方面に、力を入れ大變に得るところがありました、其して一同は之れを論文として學校の方へ出す事になつておりますが之れからも出來るかぎり之の樣の旅行を致したいと考へて居ります」と（寫眞は多賀城址に於ける一行）

百號記念の『新聞學講習會』

早大新聞主催

早稻田大學新聞部は去る七月一日號を以て百號を數へるに至つたが今回同百號記念の意味を以てする『新聞學講習會』は去る三十日より

學長及び本莊教授を訪へばこれは單なる風評のみに止まり當局としては嘗て揚示板に示した如く此處一二年間學校を休まれて靜養されると云ふ意味の外は何等之に關した譯はないとの事である同教授病氣恢復の上は再び教壇に立たれると因に教授の現住所は神奈川縣逗子所櫻山中町一七〇七番地である

市民體育の啓發に

市の展覽會

東京市では市民の教育と保健衛生の爲め教育局及び保健局を設置して鄭命になつてゐるが、一般市民は未ださうした設備のある事さへも知らずに居る者もあり又一體何

氣 たれはかず
退進の氏垣高
大野氏の二の舞で休養だと當局の談

秋の新着品
秋の ポスツー 着用
トーコーザレブ・アバーオルブ・ンガデーカ
品逸の等トルベ・スーホ・ーパムヤヂ
是非御一覽を
丸ビル **丸菱呉服店**

社告

本紙今號二面に所載の如く立教大學新聞學會は今春より立教大學々友會の新聞雜誌部の一部として入會致候も今後共學友會外に對しては常に立教大學新聞學會の名稱を用ふるものに候間此段購讀者諸賢に及謹告候也

立教大學新聞學會

美滿津の冬の運動具！
合名會社 美滿津 本郷・赤門前 電話（小石川）845・2071

世界の名曲をレコードで聞く
MELODIUM
河田台下駄 名曲堂 電話2443
ビクター四六號 ビクター八九號 ビクター五十號 ビクター百號（絕對賣價保證付）
チニーシエラトン チニーオーケー ブランスウキック十號
日本で一番安い店 蓄音器破格提供
帝國劇場下 銀座通り 電話2443

廣告は立大新聞へ!!
御一報次第速刻參上致します

純質至廉
万年筆用 筆記用
ペイバイキン
一号丸形 豆形 二号入 六号入 十二号入 廿四号入
東京神田 鈴木インキ店
各文具紙店にアリ

十月一日發行
秋季增大號
トスミノコ工
金解禁について 世の誤解を解く 井上準之助
わが國の金解禁問題 井上辰九郎
罷業後の英勞働組合 小川市太郎
强制土地收用と食糧增殖 堀江歸一
政局打開の道 經濟學研究の改新 【社說】
全國大學專門學校 特別附錄 經濟學講座
總まくり 担任教授の人物月旦
財界不安と金融市場 勃興せる新規事業の內容
既設事業の整理變遷 取引所政策の動搖
定價据置三十錢（送料一錢）
發行所 大阪毎日新聞社 東京日日新聞社
全國大毎東日各販賣店及書店にあり

▽投稿募集
▽ニュース　學友會各部の活躍狀況
▽公海（七十行內外）　學校當局へ對する希望
▽論文（百行內外）　學級的な物に限る
▽文藝物（百行內外）
◎以上十五字詰の事
▽締切日　毎月十日、廿日、卅日、
◎學生諸君よ、振つて投稿あれ
立教大學新聞學會

種内闘爭を擺脱せよ

教授　石井重美

一、闘爭の姿

吾々は絶えざる存在に同つての闘爭の裡に生活して居る。生物界は勿論のこと、無生物界に於ても此の種の闘爭はある。例へば岩石は惰性によつて一所に靜止し、その體形を保たうとするが、日光、風雨、河水等が、それを動搖してその存在を危からしめようとする。また吾々の太陽系は、その發達の初期に於て無數の微小なる物質塊の集合から成り立つて居たが、それらの物質塊の間に不斷に存在の闘爭が行はれた結果、多くの者が淘汰され極數の適者が殘存成長して、次第に現在見られるやうな狀態になつたものであることを現代の天文學は吾々に教へる。其の他、仔細に觀察の眼を向ければ、どんな力と力との間に於ても恐らく存在の闘爭の發見されない處はないに相違ない。さういふ意味から宇宙は大きな闘爭の巷であるといふことができる。併し贅言を費やすまでもなく、吾々はしば〳〵それが誤解されるやうに決して此の『闘爭』なる言葉をたゞ互に打ち合つたり、撥ね飛ばし合つたり、或ひは殺し合つたりするといふやうな狹い意味に解釋してはならない。また、意識の有無など吾々は勿論問ふところではない。吾吾はできるだけ廣い意味を此の言葉によるべきである。

二、三種の生活闘爭

つぎに存在の闘爭が、生活意志を有つた生物界に於て見出される時は生活闘爭となる。この生活闘爭には、對手の種別關係から、大凡そ下の三つの異なつた相を區別することができる。

第一、種内闘爭（Intraspoitio struggle, アーサー・トムレンの所謂Struggle between follows）

第二、種間闘爭（Interspoitio struggle, トムソンのStruggle between fows）

第三、環境闘爭（Environmental struggle-トムソンのstruggle with fake）

右の中、最初の種内闘爭は、同種類の生物の間の生活闘爭であつて、狹い地域にゴチ〳〵と蔣かれた芝の種子から發生した芽生と芽生との間に起るもの一つ活寶の中に入れて置かれた鶏卵の盛んな子供のよくする共喰等は其例である。ロブスターといふ蝦の此闘爭は對手が同種類の生物である關係上、其の要求する所の物（主として食物）がまた同一である爲め自然に最も激烈深刻な性質を帶びる傾がある。次の種間闘爭は、異種類の生物間に行はれるもので最と野獣寄生虫とその宿主との關係などは之に屬するものである。終りの環境闘爭は、無生的の周圍（例へば、寒冷、炎暑、沙漠、洪水、地震……等）に對する生物の側から見ての生活の闘爭である。

三、人類の生活闘爭

さて、人類の生活闘爭には、上に掲げた三種の闘爭樣式が俱に存在して居るが、之等の諸樣式は、時代によつてその重要さの上にそれ〴〵多少の變遷推移を經驗するのであつて、何時も同一の狀態を持續するといふわけではない。即ち、まだ人口の稀薄な、文明の程度の低い原始未開の時代に於ては人類は、只管、彼等の文化的抵抗力の上から見て貧弱な日常生活を脅かす無生的の自然や、猛獸、毒蛇、害蟲等にのみ多く心を奪はれ從つて、環境闘爭や種間闘爭が生活闘爭の主要部を占めて居たのであるが、後ち人口が增加し、文明が著しく進歩を遂げるとゝもに、次第に、種間闘爭が重要な意義を有つやうになつて來た。殊に、近來では、一方國際間の闘爭も熾烈ではあるが、他方一國内の同胞と同胞とが單なる生存要求の上に於て一層眞劍な對抗關係に立つことを餘儀なくされといふやうな奇異な現象が現はれるやうになつた。

勿論、如上の事象の發顯には、所謂『社會的淨化』としての廣い意味での社會制度の缺陷等も関與して居るであらうが、それは更に角度を變へて現在の人類が、生物學上厄介な種内闘爭の係鎖に囚はれ、七轉八倒の苦闘を體驗して居ることは蔽ふべからざる事である。

四、種内闘爭の結とその擺脱

それから、生活闘爭の結果は、不適者が自然に淘汰されて適者が殘存するの赤進化論上の法則であり、また、當然の現象としては一般に、實際もさうなるのであるが併しながら、元來、自然淘汰は盲目的なものであるから、斯樣にして殘存した適者が、必ずしも悉く文化的意味に於ての優者であるとはいひ得ない。殊に、種内闘爭は先にすでに記したやうな事情から其の性質が著しく惡性を帶びて居るので、徒らに闘爭者相互のエネルギーを消耗濫費せしめ、多くは共倒となつて、一般文化の進運を阻害することが莫大である。

それゆゑ、吾々は、一刻も早く此の愚劣な種内闘爭の域を擺脱して、吾々人類の生活内容を潤澤豊富ならしむるから、斯の如くにして節約し得たの貴重なエネルギーの一部を、種間闘爭及び環境闘爭の方向に轉用し、他の一半を用ひて、その精神生活向上の資に供すべきである。吾々の人類として爲すべきもつと大切な仕事は、山のやうに前途に堆積して居る。

書齋の窓を開いて

秋◇夜◇偶◇感

教授　岡倉由三郎

これからは一日增しに空氣が清澄になつて、秋高く、馬肥へて學窓に戻りて學生諸君が大いに讀書する時になる

その讀書なるものは、書物の中に包まれ隱されてゐる筆者の心の中へ、文字を媒介として我等に歩み入る事で、其の筆者の性格次第で我々のがん前に展開して來る。其のうち或る者は我々と見解を同じくし、我々が既に住んでゐた一角と同じ所に住んでゐるが我々よりも、もつと充實した所に起居してゐる

その充實さに遇ふ時、我々は已の不用意を感ずると共に、一歩充實した容で人生の一歩一歩を踏み強い智識、優しい、柔かい感情と云ふものを作者の筆の運くが儘に我々に受け入れて、斯くの如くにして我々の生活を一層深く、一層厚くする、これが秋の夜長の讀書の樂しみである。

若し又、今、相對してゐる作者が我々と違つた方面の人格をもつてゐる場合には、我々は廣い野原や、深い山奥ですつぽかされた時の樣に、しばらくは忙然とした紙面をなんだか恐ろしい樣な、崇高な感に打たれ、きようきよう眺めまはす。此の際に於ても我々の心の世界は大いに擴大せられ深められる。エックステンドされ、リイブンされるのである。

これが灯のもとに我々がこれから日、一日と收獲する所の學窓の收獲で、斯くの如くして人生は澄み、佳み味はふに足りる樣になりインデヴイブル、ベネフルなものになる。

これは學窓の中での讀書の意義と私は思ふが……。書齋の中の灯をふうつと消して、門外に一歩出づれば滿天の星はキラ〳〵として秋の空から冬の空へかけて美しく飾る、寶玉を散りばめた様な、眞珠ぐりばめた様な形容は文字通り事實であるが稍々言ひ足りない未だ不足の感のある譬星がまばたいてチヤームしてゐる。中には月の様な、或は金星の様なまばたきをしないで美しく我々を凝視してくれるものもあるが何と云つても空の美しさを最も良く後毎に我々の眼に示してくれるのはプラネツトでなく、スターである。

中には白い色のも多いが、色々な着色をした光を放つものもあり美人の白魚の如き手を飾る白に抱かれたダイヤモンド。オパール紅玉。の類は美しいには違いないが星の美しさに比してはとてもお話しにならないと思ふ。

人がダイヤモンドを何故喜ぶか既破な女、子供は價が何千圓とすると云ふ虛榮から喜ぶかも知れないが、我々多くの、ものを考へる者は或時には石の中から、閃めいて來る言ふに云はれない紫色、碧色薄みどり、赤等と云ふ人間の言葉をもつて惡客し得ない光が出て此れに接する我々は眞の光を接しない前よりも一層清い、一層崇高な、一層精神的に大きな人間にして貰ふ事があるのを、深い敬虔と感謝の念を持つて記憶する。

又其の光も毎日何時でも見出されるのではなく、或る場合、或る角度に於て或る石の中から浮び出て來る光であり。それを氣長に待つて其の彫琢をうけ、一層眞なる人間、一層美なる人間にならうとする事がダイヤモンド其の他に對する我々の態度でなくてはならぬ。そんな氣持で指輪を持ち、眺める人が幾人あるだろうか。

空がはめてゐるダイヤ。オパールの指輪は數限りもない。それから色々に我々に放射して來る美しい光に遇つて、其の清澄な、美しい光の爲に我々の汚れた人生を忘れさせて貰ふ。で我々が空を仰ぐ事は讀者に依つて得る力よりも、もつと我々に偉大な効力を與へるこんな風に考へて來ると、天地の間に住んでゐる人間そのものも又一つ、一つの星の如くに女、男

幻想にある眞畫

武藤重勝

澗。
みちあふれる花ぞの。
きんいろのランプはちらちら
あしもとに雫れる。
『うるはしの盜人』…むせかへる
青春の海。
警笛は岳の向ふに眠つてゐる。
ひるま。丘は豊滿な乳房！
花は麗しい蓮炉のためいき。
闇かにたちのぼる ―（樹々は圓い實をつむぐ）― 村林の煙の糸
ひるま。

老人、子供、同國の人も異國の人夫々に色々なパーソナリテイをもつて、眞の性格の發する光を四方に放つてゐる。

其の光の中に於てたま〳〵、これに觸れゝば人々を崇高ならしめ人々を清澄ならしめるものがたとへ、どんな卑しい身分。高い身分の別なく、包まれてゐるのではあるまいかと思ふ。

天文學者が夜毎に星を視て暮す樣に人間を見て其の人がもつ光を樂しんで行きたいと思ふ。それが文學者の立場であると思ふ。

そう考へると秋の書齋の中も、秋の空も、其の他の季節に於ける人も、それ〴〵美しい。

人生は實に佳み甲斐があると思ふ

靜まりゆく午後三時……。
あかるい幻燈つなかを
跳けぬけてゆけ！
『うるはしの盜人』
海鳴もとほく
風と響笛は行つまじく眠つて居
丘。
ランプを消しながら考へる。
このふかぶかした蒼い孤獨。
それに
ぬすんでやりたい眞紅な繪具
の唇。
やはらかなソプラノの唇
一九二六、十、

山の馬車にて

江原調

私と若い男女の二人を乗せた乘合馬車は蹄道をうね〳〵と走つて行つた。九月も末である

山々には白々と山女郎花が咲きむように迫つて來ると、心は涼冷の秋に憑へて來るのであつた。雌の虫りの音にも、馬の蹄の響にも秋はもう凡てに充滿してゐた。

道端には澤がさらさうと若櫻を靡

『人を誰だと思つてるんだい』
『あんただと思つてるわ』
『ふざけるない――たが、女郎つて何だか知つてるのかい、一體』
『そんなもの知らないわ』
『知らないだ。ら、女郎つて云ふのは娼妓の事だよ』
『娼妓つて』
『賣春婦のことさ春を賣るんだよ』
『春を賣るの？』

何と云ふ汚い二人會話であらう私はあまりの不愉快さに今更ながら彼等を見つめた。私は言然犬に喰はれたものであつた。女は男の膝に片足のせて、頭にかじりついてゐた。何と云ふ嬌態であらう。私の存在を無視した彼等の態度は、少からず私を憤慨させた。いつそ降りようか。併し降りたが

泉

（二科美術展）　長島重氏作

最後何時來るか解らない馬車であつた。私はぢつと眼を伏せた。

去年の夏私はこの道を從妹と二人でやはりこの馬車に搖られてゐた。山百合と撫子花が咲き亂してゐたこの道であつた。

『あれが丹澤山で之が酒匂川ですの』

さう云つて指さした彼女の手は眞白であつた。私は摘入る樣にその手をみつめてゐた。

『あたしどんなに兄さんの來るのを待つてゐたか知れないわ』

さう云つた彼女の頃を見た時、私は彼女を抱いてゐた。馬車は二人の無限の世界であつた。

馬車はがら〳〵と樓を漕つた。

『知つてるさ』
『どうかくか知つてる？』
『女郎花と撫子くんじやないか』
『まあ、偉いわね』

そこで紅バラと白バラとは互につゝましく
目と目を見合はせました。
藤の花のベールを透かして
けれども黄バラの心の中は
安醜者の征服感で一つぱいでした

馬車はいつか終點に近づいてゐた。秋の澄みきつた太陽が明るく輝いてゐた。私は初めて見た秋光の如くすき通つた大空を見上げた。

淚に濕んだ眼に遥か山嶺を過ぎる數條の雲が靡樣が映した。その高々と肥してゐる。山の風はもう、うつすら寒い。杉木立の間に見える楓の葉は純い朝光を浴びた黄色さで。

『あつた。溪流のせゝらぎが食ひこ

彼は凡ゆる裏情をして互に見合つてゐる最中だつた。彼等は全く感覺の世界に生きてゐた。私は危く噴飯を禁じ得ない所であつた。併しこの嬌態をさらけてゐる田舍町の生意氣らしい男女の關係を考へた時、私自身も果してこの男女を傍觀し得たであらうか。私は懊然として自分の身を考へねばならなかつた。彼女――從妹は私の戀人でなかつたらうか。少くも彼女は私の感覺の上に立つた一人の女ではなかつたか、彼女から女を取り除けた時、私は彼女に何を感ずるであらうか。

秋も彼等と同樣嬌態を演じてゐる一人であつた。女性を女性と見た時、美しい彼女は自分の戀人であつたのだ。賣春婦に對すると同じ感覺で立つてゐた自分であつたはるばるこの山中にやつて來た自分の目的はやはり彼女から女性を求めることであつたのだ。私は今更の樣に自分の行ひが恥かしかつた。

薔薇の惱み

英籠閣

一つの花瓶にさゝれた
紅・白・黄の
三色のバラがありました。
時ン中の一番遠の高い黄バラは
右を眺めて申しました。

紅バラさん
あなたは若くて美しい
紅玉の樣に眞紅な唇と
眞珠の樣に輝いて居る眼とは
白バラの心を引かずにはゐません
紅バラさん
白バラの心を知つてゐるけません
何故つて、あなたの皮膚の下に
流れて居る鳴液には
純度の去の毒汁が混じつて居ます
紅バラは清淨無垢なんですもの

白バラさん
あなたの眞白い手は
大理石の樣に滑かです。
でも白バラさん
その手で紅バラを
撫でしてゐるけません。
何故つて、あなたの皮膚の下に
流れて居る鳴液には
純度の去の毒汁が混じつて居ます
白バラは清淨無垢なんですもの

兎も角、馬琴は何處へ行つても親には一方ならぬ心配を掛け、兄弟達には殆ど見放されてゐた。が斯うした不羈奔放な彼も、獨り文學には熟誠であつた。その上伯母といふ人が理智的な、男勝りの質の婦人があつた所から、馬琴の才智を愛し、彼の爲すが儘に放任し彼の私的生活には殆ど干渉しなかつた。馬琴もその頃は、頭を固めてゐた時だつたので、髮の生えるまでは外へ出なかつた。彼は、それを幸ひに終日籠居して只管讀書に耽つた。天明三年十七歳の時、一先づ伯母の家を辭した彼は、某家へ仕官したが、幾年ならずして此家も暇とたつて仕舞つた。そして此の頃から嘗て彼は戯作者にでもなつてみやうかと思ふやうになつてゐた。個々深川の永代寺で京都大佛の西にある辯財天の開帳があつた。そして其の辯財天と共に始めて江戸に下つて來た王生狂言の見せ物があつたが、それが又非常に珍らしいと言つて大評判であつた。仍て鼓に思ひついた彼は、早速黄表紙一種を作り『廿日餘五十兩書用面二分狂言』と命名したが、是れが彼の廿四歳の時であつた。此の出版方を彼は當時の大家山東京傳に頼んだが、京傳は之を見て、馬琴の才を賞め、それを快よく承諾した。馬琴は三十二の時『猫射羅子』といふ洒落本を作つたが、彼の生涯を通じての作物中、洒落本は是れが唯一である。後年彼は洒落本を書いたことを後悔して止まなかつた。といふのは後大いに勸懲主義を標榜し、學者を以て自ら任じた彼が博世唯一つの洒落本の爲に自分が讒られはしないかと恐れたからである。晩年に至つて、彼は各書肆を渉りまつては猫射羅子を購ひ蒐め、片つ端しから燒いてしまふことに腐心したさうである。

文化三年彼が四十歳時の書いた『椿說弓張月』は馬琴の出世作とも云ふべきものであつた。此の作が當時素晴しい好評を博したことは言ふまでもないが、一方書肆の方でも少からぬ利益を占めることが出來たと見え、板元は彼に稿料の外に改めて金十圓を贈つた程であつたた。馬琴自身も餘程嬉しかつたらしく畫工北斎に爲朝の肖像を描かせ、之を賛軸にして祭つたといふことである。

彼が一代の大作『南總里見八犬傳』は、文化十一年四十八歳にして始めて稿を起し、天保十二年七十五歳に至つて完成されたのであるが、彼が此の一大雄編を完成させる爲に傾倒した努力と苦心とには實に驚嘆すべきものがあつた。彼は同書初編の自序の末に

文化十一年甲戌秋九月十九日云

古い話

粟屋四郎

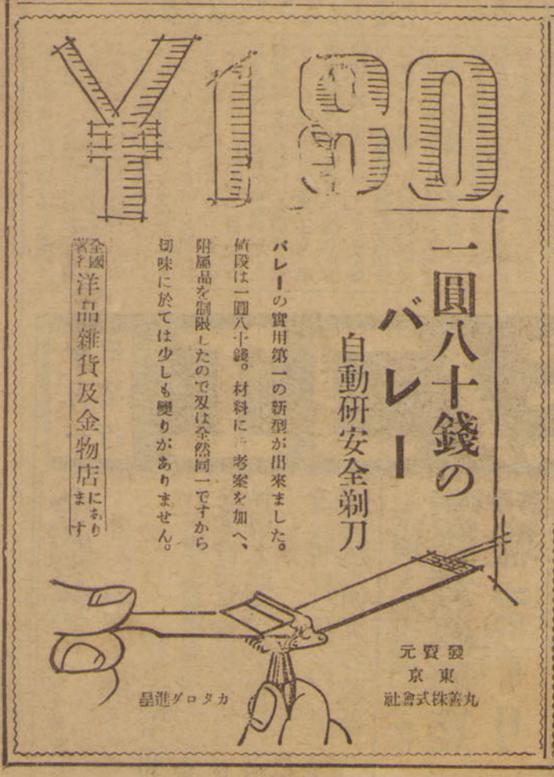
ある。

明和四年彼が九歳の時、彼の父は鬼籠の人となつた。彼は十三歳にして泰公子の身となつた。けれども一年も經たぬ間に暇を出され、或る女との間答『江原小彌太（科學と人間（同上）新聞記者醜便の解書（島谷亮輔）定價二十錢、越山堂發行

新刊紹介

△江原小彌太個人雜誌（十月號）目次、江原君と僕（帆刈芳之助）江原氏の創作的態度（AB）と江原氏の私的生活（太公望）或る女との回答『江原小彌太』科學と人間（同上）新聞記者醜便の解書（島谷亮輔）定價二十錢、越山堂發行

△愛國婦人（十月號）定價三十錢　東京市麹町區飯田町一愛國婦人會發行



たしまひが揃地着の物冬
へ店當は用御の服洋
牛込区新小川町三ノ一九
久保田洋服店

秋の夜の散歩に
パラダイスのお茶を
召せ……
一般料理
喫茶
パラダイス
醫師横通り
遠士運動具店入り

一切の印刷は御用命下さいと
迅速丁寧を位本とすまし
更生堂
名刺印刷
書籍
池袋　師横通り

シールド・ニコルソン原著
鷲野隼太郎譯述
最新刊
經濟學原論（生産論）
◇◇菊判總布製函入
◇◇定價二圓三錢
◇◇送料貴留十八錢
本書はマーシヤル原著並びにトーシッグ原著と共に現代英國派の經濟學文獻中三大原論である。ニコルソン教授は別に新學說を提唱したものでないが、その論理の鋭いことに至つては殆んど他に比儔を見ない程である、一例を擧げればマーシヤルの『消費者貨子論』批評の如きは明快透徹の議論として世界の學者が一樣に稱讚する所である。本編には經濟學の主要なる生産論に就て一般理論を明瞭に述べて、而も其を應用數學の一部門に墮落せしめず、而してアダムスミス及びミルの廣汎な基礎の上に立論して而かも不當に倫理學、法學又は政治學の領域内に侵入することなきを期した極めて材料豊富で經濟學研究者の好伴侶である。
『分配論』十月一日發賣『交換論』『動態論』逐次刊行す
發行所　東京本郷區上富士前町　振替東京四九〇〇三番　富文堂